

シリーズ ひと ～現場に生きる～ 第2回

あべ 阿部 和弘さん、 こんの 紺野 翼さん、 だしま 出島 広太さん 釧路市 阿寒共立土建(株) 工務部



左から阿部さん、紺野さん、出島さん

1993年の釧路沖地震や1994年の北海道東方沖地震など、過去に大きな地震が頻発している釧路市。道路啓開（障害物を取り除いて通行できるようにすること）をはじめ災害時の最前線で活躍する建設業は、地域を守るためになくはならない存在です。釧路市では建設業で働く若手社員のインタビュー記事や動画を通じて、建設業のイメージアップを図るWEBサイト「ハタラク」を開設しています。

そこに最初に登場したのが、阿寒共立土建(株)の出島広太さんです。出島さんが関わっている別海町の農業土木の工事現場では、ほかにも2名の若手社員が頑張っていると聞き、現場事務所にお邪魔しました。

「橋の模型作りをきっかけに、土木に転身」

別海町中春別で、牛のふん尿を希釈して牧草地に散布するための肥培かんがい施設の工事を手掛けている出島広太さんは現在27歳。釧路江南高校を卒業後、自動車工学を学びたいと北見工業大学に進学しましたが、

1年生のときに創造基礎の授業で橋の模型を作ったことがきっかけで、土木に興味を湧いたと言います。2年生から土木を学ぶ社会環境工学を選択し、卒業後は地元で就職したいと知人の紹介で阿寒共立土建に入社しました。当時の印象を「土建屋さんは騒がしいイメージでしたが、みんな紳士でした（笑）」と話します。

入社5年目の出島さん。今年は農業土木の現場ですが、これまで一番多かったのは道路工事で、道東自動車道の建設です。「白糠ICから阿寒ICの工事に関わり、情報化施工にも携わることができました。やはり関わった現場には愛着があります。今でも道東自動車道を利用すると現場を見ることができると、うれしいですね。スピードを落としてゆっくり確認することができないのが残念なのですが…」と手掛けた工事への思いを馳せます。

阿寒IC供用に向けた工事では、クマタカやオジロワシなどの猛禽類に影響を与えないように配慮し、モニタリング調査を行いながら施工したことや輻輳した

工事の調整を図り、できるだけ迅速に阿寒ICの供用開始に努めたこと、そして地域への事前説明や安全対策、地元高校生のインターンシップ受け入れなど、工事の模範になるものとして、平成28年度に北海道開発局長から優良工事に表彰されています。

「現場は毎回すべて条件が違います。簡単そうな現場でも問題が起きることがあって、その対応にはマニュアルがありません。どう対処するかはいつも頭を悩ませますが、上司と相談しながら解決しています」と難しさの中にも仕事の醍醐味を見出しているようです。「昨年、一級土木施工管理技士を取得し、今年は一級管工事施工管理技士、そして最終的には技術士の資格を取得することが夢」と、誠実な人柄をのぞかせながら、将来の目標を語ってくれました。

「前職とは違う、緊張感とやりがい」

昨年11月に^{かじ}出島さんと同じ27歳の^{かじ}紺野翼さんが入社しました。紺野さんは釧路工業高校の電子機械科を卒業後、鉄鋼業の鍛冶・溶接の経験を積んで転職してきました。「家庭を持ち、子どもも生まれたので、よりレベルアップしたいと考え、知人の紹介で入社を決めました。仕事の内容がまったく違うので戸惑いもありますが、いろいろな現場を体験して知識を吸収したいと思っています。まずは、二級土木施工管理技士を受験し、合格することが目標。出島さんと年齢は一緒ですが、先にこの業界に入った先輩で、目標です」と意欲的です。

前職ではほとんどの納入先が民間でしたが、「ここでは地域住民の皆さんが生活するために使う道路や下水道などの工事を担当しているので、緊張感が違います」と身が引き締まる思いもあるようです。

そして、今年4月に入社したのが、阿部信之社長の長男の和弘さん(30歳)です。阿部さんは釧路湖陵高校を卒業し、室蘭工業大学に進学しました。「釧路は地震が多く、防災に興味があった」ことから地盤工学などについて学び、大学院(修士課程)修了後は札幌



光波測距儀で測量した値をタブレットで確認する紺野さんと出島さん

市内の地質・土質調査や水資源調査、井戸施工などを手掛けている企業に就職しました。6年間の在職中に一級土木施工管理技士と地質調査技士を取得し、帰郷しました。

「以前は地質調査や土質試験をやっていましたが、土木は規模が違います。土工やコンクリートなど工種が多く、すべて管理しなければなりません。いろいろな人への対応やトラブルの対処もあります。今の現場でも火山灰地盤のために、軽石が詰まってポンプが水没するトラブルがありました。現場で発生した諸問題を経験から予見し、解決していくことがやりがいの一つですね」と言います。

地域を守る建設業を次の時代に引き継ぐために

3人が勤務する阿寒共立土建は、1928(昭和3)年に旧鳥取村(現釧路市山花)で阿部信之社長の祖父、阿部福次郎氏が個人で創業し、林業と薪炭業を主に、土木や建築も請け負っていました。1948(昭和23)年、隣の旧阿寒村(現釧路市阿寒町)に建設会社がなかったことから、地元有志の出資により「阿寒共立土建株式会社」として会社を設立し、阿寒や釧路市内など4つの営業所で事業を展開していた時代もありました。昭和30年代、二代目の阿部徳松氏が副社長の時に、阿寒湖畔簡易上水道築造工事や初代「釧路市丹頂鶴自然公園」の建築工事などに携わり、その技術力に高い評

価が寄せられるようになって、現在に至っています。2001年に社長に就任した信之さんは土木技術屋上がりで「父からは手に職をつけ、そして自分自身のためにできるだけ多くの資格を取得するように教育されたので、社員にも資格取得を勧めています」と、全社員に現場を経験させながら資格を取得できるように支援し、会社の基盤である技術力向上に努めています。

また、釧路沖地震時に重機を1台しか所有していなかった後悔から、「災害時は自社保有の重機がなければ対応できない」と毎年1台ずつ重機を導入。現在は20台超になり、災害に備えた会社づくりにも目を配っています。阿部社長は釧路市建設事業協会の会長も務め、昨年度から地元中学生を対象にした作文コンクールの実施など、次世代の建設業の人材を確保する取り組みにも努めてきました。

若手人材の確保は釧路市内の建設業の中でも大きな課題の一つで、残念ながら入社後の定着率が低いという状況が続いています。特に、公共工事は事務作業が多く、拘束時間が長い煩雑な書類整理を敬遠して、離職してしまう人が多いそうです。「ここ数年、当社もできるだけ若い人を採用してきましたが、半数以上は離職しております」と阿部社長。それでも、来年は創業90周年を迎えることになり、「若い社員にはいろいろなことを経験してもらいたい」と3人に期待を寄せています。

お互いに刺激し合って、キャリアアップ

同世代の3人が同じ現場で仕事をしていることは、いろいろな意味で好循環につながっているようです。

「二人の話を聞いていると、専門的な難しい用語がたくさん出てきて、『あれ、何を話しているんだろう?』ということがあります。二人ともすごく楽しそうに話していて『ついていけない』と思うことも…」と恐る恐る話す紺野さん。それでも「将来は肩を並べられるようになりたい」と二人が目標になっています。

一方、出島さんは「紺野さんは現場に入って日が浅



現場で測量ポールを掲げる阿部さん

いのですが、めげない力強さがあります。阿部さんは、コンサルで培ってきた知識が豊富。身近な同世代では今までにいなかった存在で、たった3歳年上なのに、本当にすごいと尊敬しています」と言います。

将来、経営に携わる阿部さんは「紺野さんはいろいろな人に教えてもらって焦らないで頑張してほしい。出島さんは、今後は会社の技術屋さんのモデルになるような存在になってほしい。以前から技術士の取得を目指していたので、身近に技術士の取得を目標としている出島さんがいるので刺激になっています」と、それぞれの存在が自分を高めていくきっかけになっています。同世代が近くにいることで、キャリアアップの動機付けや仕事の悩みを相談できるなど、定着率を高めていく要素になるようです。

工事現場で3人を見守る上司の佐澤典彦工事部次長は「出島さんは入社2年目にも一緒に仕事しましたが、予想以上の成長ぶりでかなりの戦力になっています。後輩に指導する姿は頼もしく、非常にうれしく思っています。紺野さんは社会人の経験があり、若く伸びしろがあり、とても期待しています。阿部さんも他の会社で経験を積んでいて、以前とは畑違いの職場でも、とても馴染んでいます。若い世代が3人もいるので、ほかの会社の人からうらやましがられています。私も定年まではまだ時間はありますが、この先は安心して定年を迎えられそうです」と笑いながら3人の評価を語ってくれました。